世界陶磁全集

13

桃山

世界陶磁全集 13

遼・金・元

小学館

世界陶磁全集　13　遼・金・元

© 株式会社　小学館　1981

昭和56年10月15日　初版第1刷発行
昭和59年5月30日　初版第2刷発行

定価　7800円

編集兼発行者　相賀徹夫

発行所　株式会社　小学館

東京都千代田区一ツ橋2—3—1
郵便番号　101
電話　編集　03—230—5650
　　製作　03—230—5333
　　販売　03—230—5739
振替　東京　8—200番

印刷　日本写真印刷株式会社
　　株式会社便利堂
　　株式会社光村原色版印刷所
　　凸版印刷株式会社
表紙クロス　ダイニック株式会社
用紙　王子製紙株式会社
　　三菱製紙株式会社
製本　凸版印刷株式会社

万一，落丁・乱丁などの不良品がありましたら，お取り替えいたします。

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

Printed in Japan
ISBN4-09-641013-6

世界陶磁全集 13

遼・金・元

責任編集 三上次男

世界陶磁全集 13　遼・金・元　目次

本文

渤海・遼・金・元の陶磁器生産とその歴史的背景　三上次男　131
渤海・遼の陶磁　三上次男　143
金代の陶磁　長谷部楽爾　170
元代の青磁　矢部良明　180
元の白磁と青花　佐藤雅彦　199
釉裏紅・鉄斑および各種色釉磁器
——十四世紀景徳鎮の産品を中心に——　ジョン・M・アディス　227
元代の磁州窯・吉州窯その他　長谷部楽爾　249
青花磁器の起源に関する諸問題　馮先銘　261
インドおよび中近東向けの元代青花磁器　マーガレット・メドレー　270
遼・金・元陶磁の文様　中野徹　279
年代の明らかな主要遺跡　佐々木達夫編　295

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

図版

原色図版・解説 9

本文挿入原色図版

渤海・遼 153

青磁 181

白磁・青花・釉裏紅 205

磁州窯・吉州窯・鈞窯 237

遼・金・元陶磁の文様 284

図版解説 305

三上次男　長谷部楽爾

矢部良明　佐藤雅彦

弓場紀知

主要文献目録 332

弓場紀知編

年表 336

弓場紀知　佐々木達夫　編

英文本文目次 iii

英文図版目録 iv

西田宏子

凡例

一、この巻では、渤海、遼・金・元の陶磁を収録したが、いわゆる「洪武様式」をも含んでいる。

一、巻頭および本文挿入の原色図版に通し番号を付し、文章中に引用された場合には、たとえば（図1）と表記した。ただし、284～294ページの文様の図版は別番号とし、1～173の番号を付した。

一、挿図番号には Fig. を付し、文章中に引用された場合には、たとえば（挿1）と表記した。

一、巻頭の原色図版の解説は、各図版の同ページまたは前後のページに掲載した。

一、本文挿入の原色図版の解説は305～329ページに一括して掲載した。

一、図版の名称に関して、本文中の表記に若干の相違のあるものがあるが、それらは各執筆者の解釈を尊重し、統一をはかっていない。（　）内に示した補記や図版番号または挿図番号を参照されたい。また、図版の名称に付した乾瓦窯、林東窯、景徳鎮窯、磁州窯、吉州窯、鈞窯等の窯名は、かならずしも厳密な意味での生産窯を示すものではなく、系統または分類上の形式名を表わしている。

一、挿図の出典のうち、欧文書名を略記したものがあるが、それらに関しては、主要文献目録の凡例（332ページ）を参照されたい。

一、中国年号を西暦におきかえる際、原則としてその末年は改元の年を含めていない。

一、掲載作品の所蔵・保管者名は初版発行時による。

《撮影・資料提供》

安宅コレクション
出光美術館
梅沢記念館
永青文庫
大阪市立美術館
尾道市教育委員会
尾道市立美術館
海住山寺
神奈川県立博物館
金沢文庫
掬粋巧芸館
宮内庁
救世熱海美術館
建長寺
光明坊
称名寺
静嘉堂
東京国立博物館
東京大学文学部考古学研究室
富岡美術館
白鶴美術館
鑁阿寺
藤井有鄰館
ブリヂストン美術館
松岡美術館
三好記念館
大和文華館
講談社
平凡社
アート光村
坂本万七写真研究所
便利堂
坂本明美
佐藤雅彦
鈴木征一郎
中川邦昭
長谷部楽爾
繭山康彦
三上次男
宮原正行
矢部良明
吉田宏志

韓国国立中央博物館
Ashmolean Museum, Oxford
Asian Art Museum of San Francisco, The Avery Brundage Collection
Archaeological Museum, Teheran
Archaeological Survey of India
Buffalo Museum of Natural Science
Fitzwilliam Museum, Cambridge
Fogg Art Museum, Harvard University, Cambridge
Gemeentemuseum's-Gravenhage
Los Angels County Museum of Art
Musée Guimet, Paris
Musée National Adrian-Dubouché, Limoges
Musée National de Céramique, Sèvres
Museum of Far Eastern Antiquities, Stockholm
Museum of Fine Arts, Boston
National Museum of Ireland, Dublin
National Museum of Philippines, Manila
Nelson Gallery-Atkins Museum, Kansas City
Percival David Foundation of Chinese Art, London
Royal Ontario Museum, Toronto
Seattle Art Museum
Service de Documentation Photographique de la Réunion des Musées Nationaux, Paris
Staatliche Museen Preußischer Kulturbesitz Museum für Ostasiatische Kunst, Berlin (West)
The British Museum, London
The Brooklyn Museum, New York
The Cleveland Museum of Art
The Metropolitan Museum of Art, New York
Topkapı Saray Museum, Istanbul
Victoria and Albert Museum, London
文物出版社
韓 哲弘
馮 先銘
Ellen S. Smart
John M. Addis
Margaret Medley
René Roland

《装幀》
後藤市三 布施行造

《編集企画》
座右宝刊行会 後藤茂樹 斎藤菊太郎

《翻訳協力》
加賀美徹也

《編集協力》
尚文社

图

版

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1　緑釉皮嚢壷

1

緑釉皮嚢壷　遼(十世紀)　乾瓦窯

東京国立博物館

Green-glazed flask in the shape of a leather bag. *Kan-wa* yao. *Liao* dynasty. 10th century. Tokyo National Museum.　高22.0㎝　口径3.9㎝　底径10.8㎝

遼は契丹人の国だけに，支配者の好みを反映して独特の形の器が作られている。この皮嚢壷（鶏冠壷）はその一つであり，もっとも遼らしさのあふれた壷である。まず比較的荒い砂目の胎土を使って，下方はゆったりとふくらみ，上方がつぼまるフラスコ型の扁壷を作る。上部の前方には，円筒形の注口を，後方には蓮弁形の大きな釣手をつける。外開きの高台はどっしり器を支えている。そうして，注口部の下方から下胴部をめぐり，後の釣手の下まで細い紐状突帯をめぐらしてある。これはシンプルであるが，感じのよい装飾になっている。まさしく皮袋と皮紐をかたどった形である。上に鉛釉系の緑釉をかけているが，媒溶料の中にアルカリ分も入っていたとみえて，いまは美しい銀化でおおわれている。北方民族の力強さと奔放さが感じられる見事な壷である。この形式の壷は，昭和の初め日本人研究者によって鶏冠壷と名付けられたが，その名称はどの点でも妥当ではない。中国で名付けているように，皮嚢壷あるいは皮袋壷というべきである。乾瓦窯の製品。　（三上次男）

2

緑釉皮嚢壷　遼(十世紀後半)　乾瓦窯

Museum of Fine Arts, Boston

Green-glazed flask in the shape of a leather bag, decorated with incised scrolls and applied two figures. *Kan-wa* yao. *Liao* dynasty. The second half of the 10th century.　高31.7㎝　胴径17.2㎝

暗緑釉でおおわれたこの皮嚢壷は稀品であり，またすこぶる優品でもある。黒砂混じりの砂目の胎土で，横に長い張りのある袋形の扁壷を作っているが，前図の扁壷に比べると，前後のふくらみが少なく，丈は高い。そうして，突帯装飾が注口部から下胴部へ，それから尾部へとめぐらされていて，そのさまはまさしく皮革を縫い合わせた部分のようにみえる。紐に沿ってつけられている点文は縫糸の跡をあらわしているにちがいない。前の壷を皮袋とすれば，これはまさしく皮革製の袋形容器である。胴部に施されている刻線変形パルメット文も，皮革の中にやわらかく食い込んでいるようにみえる。その上部に蓋付の注口と二つの小さな釣手形の把手，さらに把手の一端に腰をすえている二人の小さい人物。すべて見事な着想であり，この壷に奥行のある趣を与えている。作行きもすぐれている。上をおおう光沢のある暗緑色の釉も皮革製品を思わせる。まさに契丹人の好みを写しているものであり，すばらしい。乾瓦窯の製品であろう。

（三上次男）

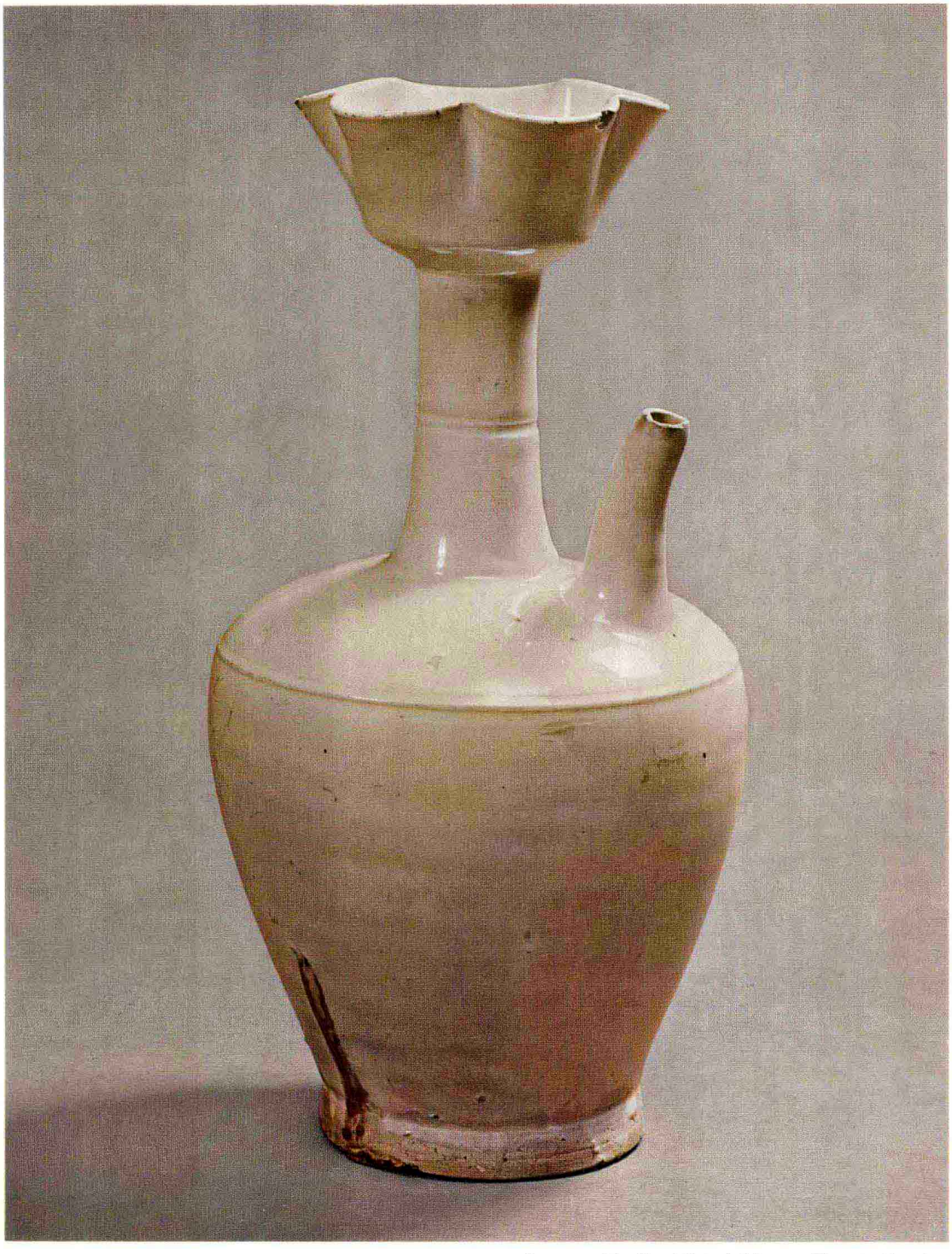
2　緑釉皮嚢壷　　Charles B. Hoyt Collection, Courtesy Museum of Fine Arts, Boston.

3 Victoria and Albert Museum, Crown Copyright.

3 白磁鉄斑文皮嚢壷 遼(十世紀) Victoria and Albert Museum, London

White porcelain flask in the shape of a leather bag, decorated with applied relief and spotted with iron brown. *Liao* dynasty 10th century. 高21.6cm

これは珍しくまたひいでた皮嚢壷である。ふっくらとした袋形の扁壷の胴部を，紐がのどやかに遊んでいる。注口部と尾部とを結んで胴体にゆったりと垂れ下がっている二重の紐は，この扁壷を釣り下げる皮紐であろう。注口部から垂れ下がった紐は，先端が蝶結びのようになっていて面白い。背面の紐は余った紐にちがいない。この紐は，前図のような皮革製品の縫目をあらわしたものではなく，文字どおりの皮紐の写しである。そうして，要所要所に鉄斑文が散らしてあるのが珍しい。豊かな器形といい，斬新な紐模様や鉄斑文といい，なみなみならぬ陶工の手腕を感じさせる。胎土は白いが，焼きはややあまく，そのためかえって暖かさを感じさせる。林東窯か，門頭溝窯の製品であろう。 (三上次男)



4

Courtesy of the Royal Ontario Museum, Toronto, Canada

4 白磁水注　遼(十世紀後半)　Royal Ontario Museum, Toronto

White porcelain ewer with foliate mouth of five lobes. *Liao* dynasty. The second half of the 10th century.

高27.9cm　胴径13.0cm

上手の遼白磁の水注である。遼の初期には皮嚢壷のように牧民的な容器もできているが，一般に遼独自の陶芸様式はまだ十分発達せず，五代時代の中国のそれを遼風に変えているものが少なくない。ここにあげた花口の水注もその一つである。この壷では，肩のやや平らかな胴部の上に細い頸部がすっくと伸び，上は大きく開いた五弁の花口で終わっている。そうして，肩の上には細い注口がのそっと立ち，下方は頑丈な高台が武骨そうに全体を支えている。このような器形の注口瓶は，同時代の中国でも作られていたが，形や線の感じはそれと違っている。花口と頸部と胴部とを結ぶプロポーションもどこかのんびりとしたところがみられるし，注口の伸び具合なども無造作で飾り気がない。遼好みの野放図さといえば，いくらか当たっている。これこそ遼の陶磁の持ち味というべきであろう。

(三上次男)

5

白地緑彩草花文長頸瓶　遼(十一世紀)　乾瓦窯

Vase with tall neck and foliate mouth, decorated with incised flowering plant through white slip and touches of green glaze. *Kan-wa* yao. *Liao* dynasty. 11th century.

高37.7cm　口径9.2cm　底径8.2cm

遼も中期に入ると，契丹的な工芸の様式や意匠が生れてきて，目を楽しませてくれる。ここにあげた白地緑彩草花文の瓶は，まさにその一つである。鉄分の多い砂質の胎土を使って瓶を作っているが，その形がまたじつにのどやかである。浅い花形口縁部の無造作な造りも，頸から肩に移るあたりののんびりとした線も，物にこだわらぬ牧民の気風をあらわしている。こうした瓶を厚く白下地でおおい，胴部いっぱいに線彫の草花文を描いている。大胆な文様構成である。それが少しも不自然ではなく，胴にぴったりとはまっている。これに濃淡の緑釉をさしているので，いっそう生気がある。草花は葱科の植物であろう。これを眺めていると，東部内モンゴルに波のように広がる草原の状景と，その野を埋め尽くす初夏の草花群の美しさが，彷彿として眼前に浮かび上がってくる。乾瓦窯の製品であろう。　(三上次男)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com